

「少女」が病む文化

—— 翻案映画『17歳のカルテ』と精神療法の民主化 ——

内山加奈枝

はじめに

スザンナ・ケイセン (Susanna Kaysen, 1948-) の『中絶された少女』 (*Girl, Interrupted*, 1993) は、ヴェトナム戦争に揺れる 60 年代後半、10 代最後の 2 年間に精神病棟で過ごした自身の体験を、25 年の歳月を経て記した回想録である。本作は、白人中産階級の少女が精神を病むという文脈において、シルヴィア・プラスの『ベル・ジャー』(1963) の系譜をひく思春期文学であり、20 世紀最後の年にジェームズ・マンゴールド監督により映画化された。原作者のケイセンは、ウィノナ・ライダー¹ が演じ、日本では『17歳のカルテ』² の題目で公開されている。

回想録では、ケイセン自らの疑念、入退院に際しての医学的根拠の曖昧さが一貫して問われ、個人の苦しみが、女性と狂気を結びつける医療によって均一化される過程が示される。一方、映画は、原作者のフェミニスト的体制批判から離れ、少女が集団生活を通して病から脱していく成長物語に翻案されている。また、原作にみられるフロイトの精神分析や近親相姦に関する言及は、誇張される形で映画に取りこまれ、フロイト受容の大衆化を顕著に反映する。

おりしも、ケイセンの回想録が出版、映画化された 90 年代は、幼少期に性的虐待を受けたという記憶を、セラピーの誘導により取り戻した娘が父親を告発する訴訟が多発した。そうした社会現象を反映するかのようになり、映画の中で自己の苦しみを表現する少女は、ある種の魅力を放つ³。



【図1】フェルメール
《中断された音楽の稽古》1658-59年頃
フリック美術館蔵



【図2】フェルメール
《真珠の耳飾りの少女》
1665-66年頃
マウリッツハイス美術館蔵

本稿はまず、ケイセンの原作が映画に翻案される際に生じたフロイトに関連する変更を、20世紀末におけるフロイト受容の特質、および米国の思潮を反映するものとして検討する。また、フロイトが診察した19世紀の女性患者に重なるケイセンの体験を、「医学」、「道徳」、「家庭」が交わる接点に生じた「思春期」の心性史において、個人の病がメディアを媒体に集団的病理として形成される近代医療の特質を示す一例として考察したい。

1. フェルメールの「少女」に思春期を読む17歳のケイセン

本題に入る前に、*Girl, Interrupted*の題目に注目したい。英語表記では、映画の題目も原作と同じであるが、これは、17世紀のオランダの画家ヨハネス・フェルメールの絵画 *Girl Interrupted at Her Music* (1658-59)【図1】から引用されたものである。

フェルメールが少女を描いた作品としては、《真珠の耳飾りの少女》(1665-66)【図2】が特に知られるが、画中の少女に実在のモデルが存在したのかは不明である。しかしながら、フェルメールの少女像は、上流階級の子女の肖像として注文制作されたものではなく、市民社会の到来により、

名もなき少女一般が絵のモチーフになりはじめたことを示す一例である⁴。

ケイセンが引用したフェルメールの絵画をみると、絵の中心から左寄りに置かれたテーブルの奥にワインが置かれ、手前には弦楽器と楽譜がみえる。テーブルに面して椅子に腰かけた少女は、楽譜か手紙と思われるものを手にしているが、少女の視線は手元にはなく、絵画の鑑賞者の方に向けられている。少女の右手の脇に立つ髭を生やした男性は、音楽教師と思われる。鑑賞者から見て正面にある壁に掛けられた画中画には、いまは色あせたキューピット像が浮かぶ。少女が鑑賞者に向かって投げかける視線は稽古の途中に部屋の扉を開けた人への一瞥ととらえるのが妥当だが、気になるのは、愛やエロスを暗示するワインやキューピット像と少女の関係性である。

フィリップ・アリエスによれば、フェルメールの時代のオランダには、「子供」という概念がすでに根づいていたが⁵、「思春期」が特定の文化的意味を帯びるのは19世紀以降になる。現代の鑑賞者であれば、画中の少女が性的に成熟するのは幾分早く、少女の顔に浮かぶ曖昧な表情は、成長への戸惑いの表出とみなすかもしれない。そのような視点でこの絵の少女に自身の姿を重ねあわせたのが、17歳のケイセンであった。

ケイセンは病院に入院する前年、高校の英語教師とデートでフリック美術館を訪れた時に初めてこの絵と出会い、画中の少女の不安げな視線から「警告」をうけたと感じる。結局彼女は、絵の中の少女の警告を聞かずに教師と交際し、まもなく精神を病んだと語る⁶。当時のケイセンは、「境界性人格障害」に加え、「性的逸脱」と診断された。作者は、性的逸脱のレッテルが女性蔑視に色塗られていると指摘するが、かつて女の病とされたヒステリーもまた、性欲異常が要因と考えられたことを思わせる⁷。「境界性人格」もまた、少なくとも20世紀後半には若い女性に多い病として定義されていた⁸。

4 内山加奈枝

2. 「疑うケイセン」から「回復するスザンナ」へ

ここから、ケイセンの回想録が映画化された際に生じた変更点を確認するが、原作と映画を比較する際には、原作者を「ケイセン」、映画の主人公を「スザンナ」と称することで両者を区別したい。

ケイセンは、かつて彼女を精神病院に送った医師の診断根拠の不当性を訴える。1967年、18歳のケイセンは50錠のアスピリンを飲み、家の外に出てから倒れた。アメリカ史のレポートを書きたくないという希薄な動機によって試みられた自殺は未遂に終わる。ケイセンは、精神科医ではない男性医師の30分に満たない診療を受け、2週間の入院予定で送られた病院で2年間を過ごした。ゆえにケイセンは、「医者に騙された」(39)と断言する。

入院する必要性と同様に問われるのは、退院する際の診断根拠である。ケイセンに病が治癒したという自覚はなく、「幸いわたしは結婚を申し込まれたので退院できた。1968年には、結婚の申し込みならだれでも理解できた」(133)と語る。一方、スザンナの退院は、結婚という、外部から与えられた環境の変化によるものではない。あくまで本人の強い意志のもとに回復を勝ち取ったように演出されるが、その際にスザンナの反面教師役として、人物造形に大きな変更が加えられるのがリサという少女である。

原作のリサは、病院から脱走を繰り返す一方、ケイセンには快活で面白い人物だ。ところが、アンジェリーナ・ジョリー演じる映画のリサは脱走癖に加え、仲間を死に誘導する少女として演出される。リサに自殺に追いこまれる少女は、父親との性的な関係が疑われるデイジーである。原作と映画双方において、父に対するデイジーの相反する感情は、彼女が父親が病室に運ぶ骨つきチキンのみを口にする一方、絶えず看護師に下剤をねだることに現れる。

原作のリサは、デイジーの父が娘のために購入したというアパートを「愛の巣」(34)と呼び、父と娘の性的関係を憶測するが、そこに攻撃性は感じられない。例年、クリスマス病院で過ごしていたデイジーは、その年は

クリスマス前に退院し、新しいアパートで過ごすものの、翌年5月に亡くなる。入院中の少女たちは、デイジーの突然の訃報に「自殺」を推測するが、デイジーの死の要因が話題になることはない。ところが、映画のリサはフロイトを持ち出し、デイジーが早く退院できたのは、医者に「秘密」、つまり病の要因となっている体験を告白したからだとしてスザンナに言う。

『17歳のカルテ』は、スザンナの回復の伏線として、リサとスザンナの蜜月を設定し、スザンナがリサの影響から抜け出す過程を演出する。そのために映画が創作するのが、リサとデイジーの「対立」である。原作にはケイセンが病院を脱走した記述はない。だが、映画のリサはスザンナを誘い出し、2人してデイジーのアパートに入りこむ。デイジーと口論になったリサは、デイジーが父親との性的関係を享受していると言い放つ。翌朝、スザンナは亡くなったデイジーの姿を発見し、仲間を追い詰めたリサを非難する。スザンナのその後の変化と退院は、リサと距離を置き、自ら社会復帰を目指すという文脈で観客に理解されるだろう。

原作にはない、映画の最後に用意されたもうひとつ重要な対立は、スザンナとリサの対決である。スザンナが退院を許されたことを知ったリサは、地下に思春期女子病棟の仲間を集め、勝手に持ち出したスザンナの日記を読みあげる。日記の内容は、虚言癖のあるジョージナや自らに火をつけたポリーに対する分析的な記述である。

スザンナに非難されたりサは、仲間はなぜリサの病の核心をつかないのかと問い、スザンナは思わず、それはリサの心が死んでいるからだと言を吐く。ここで登場人物や映画の観客にある種のカタルシスが生じるように思われる。カタルシスは、アリストテレスの演劇論にまでさかのぼるが、フロイトは、精神分析の源流となったアンナ・Oの症例で情動を言語によって放出することを手助けする療法を「カタルシス療法」としている。精神科医と患者の対話は、映画ではリサとデイジー、スザンナとリサの対決に劇的に転移されていると考えることができよう。

スザンナはリサと対決した翌日、ベッドの上で拘束具をつけられ無言で

6 内山加奈枝

横たわるリサの指にマネキアを塗り、他の仲間たちと控えめな和解をした後に病院を去る。映画『17歳のカルテ』は、リサの影響を強く受けていたスザンナが、作家になるという希望を医師に告げ、自立していく少女の成長物語と解釈することができる。

原作には存在しない、映画の創作をもうひとつ挙げておきたい。映画には、入院中の少女たちが夜間に診察室に忍び込み、自分たちのカルテを探し出して読みあげる場面がある。スザンナやリサは、医師の診断が自己認識に一致しているか検討する。映画が演出する少女たちの自己を分析する力は、フロイトの『ヒステリー研究』の最初の症例アンナ・Oにすでに備わっていたものである。次に、19世紀の女性患者とケイセンの体験を重ねて読むことで、近代以降の精神医療の特質を検討したい。

3. フロイト受容の初期と60年代を結ぶ「医学」、「道徳」、「家庭」

フロイトがアメリカの土を踏む1909年は、1869年にジョージ・ビールド (George Miller Beard, 1839–1883) が「神経衰弱」(Neurasthenia) と名づけたアメリカ発祥の神経症が流行した結果、米国内ではすでにセラピー文化が根づいていた。この病は、特にアメリカ東部の都市部に住む知識人が訴えた不定愁訴であり、新聞や小説によく登場する流行病であった。

ジャクソン・リアーズによると、19世紀末のアメリカでは、自己統制が主軸となる生産者の価値観から、他者志向的で受動的な主体を形成する消費資本主義に移りかわる一方、中上流階級では聖職者、医療関係者、教育者によって「健康」と「道徳」が結びつけられ、性アイデンティティを含む自己管理の倫理が強化された⁹。しかしながら、宗教の権威的枠組みが解体されていく時代にあっては、信仰と結びつかない自己意識は悩ましく、ヴィクトリア朝時代の人びとの内面生活は、自律と他律のアンビバレンスに引き裂かれていた。こうした矛盾が顕在化した場所がブルジョア家庭であり、子供は自立心を称揚される一方、親に従順であることが求められた¹⁰。

思春期の概念は、こうした近代の矛盾が露呈した頃に成立している。ア

アメリカでは1890年代から1920年代頃、農業社会から産業社会に移行する中で、子供がよりよい職業につくために教育が重視されるようになり、将来有望な労働者になるための準備期間として「思春期」の概念が確立した¹¹。フロイトの研究にいち早く注目し、フロイト最初で最後の渡米と講演を実現させたのが、青年心理学の第一人者スタンレー・ホール (Granville Stanley Hall, 1844–1924) であったことは注目に値する。フロイトの有名なエディプス・コンプレックスは、子供、特に男児の心の発達を家族関係に基礎づけたが、ホールにおいても、将来有望な成人となるための情緒的、知的な発達は主に男子を対象とした問題であり、将来母となる女子の高等教育は重視されなかった¹²。

フロイトがウィーンでヒステリー患者を診療し、アメリカでは神経衰弱が流行したヴィクトリア朝時代からケイセンが病んだ60年代の精神医療の連続性を指摘できるひとつの側面は、健康と道徳を結びつける場が「家庭」であり、特に中産階級の若い娘が精神医療の対象となったことだ。少女が精神病院に送られる構図には、学びの期間である思春期に、未来の労働力として男子ほど期待されない女子が生産性のない病であっても害は少ないという社会的認識が影響したかもしれない。ケイセンと同年代のスーザン・チーバーは、『中断された少女』の書評で、1960年代の白人少女はアイビー・リーグの女子大に進学する以外、高級精神病院に送られたと記す¹³。

ケイセンもまた、「大学費用が病院代に化けた」娘のひとりであり(95)、マクリン病院の周辺は裕福な中産階級の集まる地域であったと語る(49)。ケイセンは、自分以外の女性の級友全員が大学に進学したという高校に通い、彼女の親の教育レベルも高いことが推測される。成人したケイセンは、自分を病院に送った医師の判断基準を「予防医療」だと推測する。「この娘の両親とは二年前のパーティーで出会ったかな？ ハーバードかMITの教員ではなかったかな。ブーツはくたびれているが、コートは上等だ。〈中略〉外の世界に戻せば、良心が痛む」(40)。ケイセンが疑うのは、彼女が

医療費を賄える立派な家庭の子女であることが、医師の診断に影響を及ぼしたということだ。

医師がケイセンを説得した「休息」(rest)という言葉は、19世紀のフェミニスト作家シャーロット・パーキンズ・ギルマン(Charlotte Perkins Gilman, 1860–1935)に施された安静療法(rest cure)を思い起こさせる。ギルマンの著名なゴシック短編小説「黄色い壁紙」(“The Yellow Wall-paper,” 1892)では、出産後間もなく神経衰弱にかかった女性が医師である夫の目を盗んで執筆を行うが、やがて発狂する。ギルマンは、産後鬱に苦しむ彼女に一生筆を持つことを禁じた医師ウィアー・ミッチェル(Silas Weir Mitchell, 1829–1914)の処方に対し執筆活動に戻ることで鬱から脱したが、女性の知的活動を制限する療法を批判するエッセイを残した¹⁴。約80年後、執筆で身を立てるというケイセンの夢もまた、ソーシャルワーカーの同意を得ない。

ケイセンは、自らがうけた精神分析を「それについてもっと話してくれ」という医師の誘導からほとんどどこにも行きつかない体験として「あきあきした」(180)と表現する。だが、フロイトが精神分析の着想を得た患者アンナ・Oは、医師に促されることなく自ら語った。フロイトの先輩医師ヨーゼフ・ブロイアーの患者であったアンナは、傾眠時に病因となっていた体験を想起し、「語る」ことで神経症を軽減させていた。この方法を自ら「語り療法」(talking cure)と名づけたアンナことベルタ・パッペンハイムは、のちにドイツのフェミニズムを代表する活動家に転身をとげ、生涯、自身が有名な症例であることを認めず、精神分析に敵対的であった¹⁵。

フロイトは、彼がパリで学んだ神経学の権威シャルコー(Jean-Martin Charcot, 1825–93)が患者の外面をひたすら観察したのとは対照的に、患者の語りに耳を傾け、患者との双方向性を重視した点において画期的にみえる。だが、サンダー・L・ギルマンの一連の研究が指摘するように、外面から内面の臨床学への転換には、フロイトが大学で反ユダヤ主義の嵐を体験したユダヤ人であり、当時の西欧で流布された、ユダヤ人は精神病に

罹患しやすいという見解がユダヤ人の外見的特徴を根拠とする風潮に向きあわざるをえなかったという背景がある¹⁶。19世紀には、近親婚が多く、割礼によって身体が女性化していると考えられたユダヤ人男性は、性病やヒステリーに罹患しやすいと考えられていた。フロイトは、人種や性別を問わないトラウマ体験をヒステリーの原因としたため、生物学的に女性が罹患しやすいと唱えたわけではない。だが、アンナ・Oやドラ（本名イダ・バウアー）といった重要な症例の患者がユダヤ人であり、ドラの父が梅毒であるといったユダヤ的な文脈がブロイアーやフロイトのテキストから欠落しているのは、彼らの劣等感を医学という科学的権威でカモフラージュする試みとみなされうる¹⁷。

フロイトを英雄として描く伝記を著し、その中でアンナの実名を暴露したアーネスト・ジョーンズ (Ernest Jones, 1879–1958) は、ブロイアーのカタルシス療法からフロイトが脱皮するきっかけとなったエリーザベトの症例を「患者が医師の研究を助けた例」として紹介している¹⁸。この女性患者は、額に手を置き加圧しながら質問を続けるフロイトにもっと自由に語らせてほしいと主張し、その結果、フロイト独自の「自由連想法」が確立した。

興味深いことに、ジョーンズは、エリーザベトの貢献を本文ではなく「註」に控えめに入れ、その註に続けてブロイアーのカタルシス療法もまた、アンナが発見したものであるとコメントしている。しかも、フロイトとブロイアーの共著『ヒステリー研究』(1895)に、アンナの「お話し療法」を「カタルシス法」と記したのは、ブロイアーではなくフロイトである。科学的な理論を目指し構築された精神分析であるが、診断を下し病名を生み出す医師と拮抗する女性患者の力は、医師の言説の隙間に見出すことができる。

それでも、科学信奉に基づく医師の権威は、患者の家族や医師の望む特定の女性像の構築や女性の生殖能力の管理に与してきた¹⁹。エレイン・ショーウォーターは、ヴィクトリア朝の三大神経症—ヒステリー、拒食症、

神経衰弱のいずれにおいても、男性医師と女性患者の戦いの熾烈さを指摘している²⁰。ここで改めて注目したいのは、医師が患者に道徳を教える存在として家庭に介入していることだ。エネルギーの保存という観点から女性の身体を管理したミッチェルの安静療法は、フロイトも一時期はカタルシス法と併用したが、ミッチェルは、患者の知的活動を制限し退屈させることを患者への「懲罰」として捉えていた²¹。19世紀フランスにおいても、医師はまるで「司祭」のように患者に説教しながら、治療を行ったという²²。フロイト自身もまた、患者に語らせる医師を啓蒙家や教師に例えるに終わらず、「司祭として患者へのいたわりや敬意を持ち続け、告白が終われば患者にいわば罪の許しを与える」と述べている²³。アンナやドラが裕福なブルジョア家庭の子女であり、プロイアーやフロイトが、患者の家族に助言を行う家庭医であったことは重要であろう。

ミシェル・フーコーは、中世の君主権的権力が近代国家において規律タイプの権力にとって代わられた後、唯一君主権的権力が現存する制度こそが家庭であると言う。19世紀に出現した孤児院や非行少年のための規律的施設は家庭の代替物であり、そこに登場したのが、精神病理学や精神分析学など心の専門領域である²⁴。近代以降の主体形成においてフーコーの思想に倣うニコラス・ローズによれば、20世紀初期、軍事や産業における目標を達成するために必要とされた、自由民主主義の原理と矛盾することなしに統治可能な主体、つまり「道徳意識の高い主体」を形成する装置として期待されたのが家庭であり、母親であった²⁵。戦時には、爆撃による影響や疎開により、親から離された子供を心理学者が観察する機会が多く提供され、そうした環境で子供を分析したひとりがフロイトの愛娘アンナ・フロイトである。子供の成長過程が研究された結果、母子間の絆を通じて人々の精神衛生を統治しようとする傾向は戦中に生まれ、1950代から60年代を通じて公的な報告書にまとめられた²⁶。

ケイセンの記録はこうした社会背景に符合し、60年代に入院していた少女たちはみな家族こそが病の元凶であると信じ、家族みなが狂う中、娘が

代表として病院に送り込まれたと証言する(95)。50年代にケイセンと同じマククリーン病院に入院したシルヴィア・プラスの自伝的小説もまた、作者の分身的ヒロインが母に抱く殺意を描く。映画『17歳のカルテ』では母娘関係に脚色が加えられる。スザンナの母は、娘の病は、幼児の時に身体を縛りつけた結果もたらされたのではないかという疑念を医者に吐露する。プラスと同じ1932年生まれのアナ・グリーンと同種の自伝小説でも、娘の病因を探る少女の母親は、かつて流布した誤った育児法に従った後悔を医師に告白する²⁷。こうした例は、医学のお墨つきを得た育児法が家庭に介入したことを示す。次に、『17歳のカルテ』が反映する20世紀末の精神療法の力点が、専門家から患者に移行した社会背景を考察したい。

4. 20世紀後期のフロイト受容

ここから、20世紀末にフロイトの誘惑理論が再熟した問題を検討したい。1992年、「過誤記憶症候群財団」(False Memory Syndrome Foundation)がフィラデルフィアで結成された。この発端は、この財団の理事パミラ・フレイドの成人した娘がセラピーを受けはじめてから間もなく、13年間にわたり父親からうけた性的虐待を思い出し、クリスマスに彼女の家を訪ねた両親を追い返したことに始まる。この財団は、セラピーを契機に自身の子供に性虐待の罪で訴えられた親たちを中心に3年間で7500人もを会員を集めた²⁸。

性的虐待被害者が、健忘の後に蘇った記憶にもとづき訴訟を起こすようになった社会現象の影響力としてまず筆頭に挙げられるのが、エレン・バスとローラ・デイビスの共著『生きる勇気と癒す勇気』だ。幼少期に性的虐待をうけた女性たちの癒しを目的として書かれた書は、1988年に出版されるとベストセラーになり、第3版にはFMS財団を批判する1章が追加された²⁹。

この書が性的被害者の運動を擁護するために最も多く引用するのが、ハーバード大学医学部の臨床心理学教授ジュディス・L・ハーマンである。ハー

マンは、1981年、最初の研究書『父一娘 近親相姦』を発表した。臨床の仕事をはじめてまだ日の浅かったハーマンは、1975年、同僚の女性との会話から、実に多くの女性患者が近親相姦の既往を持つことに気づき、研究を始めた³⁰。1992年に出された第2作目『心的外傷と回復』の増補版(1997)では、裁判で被害者と治療者の証言の信ぴょう性が心理学や医学の権威によって否定されることに異議を申し立てている。

ハーマンの2つの研究書に共通するのは、最初の章でフロイトが批判されていることだ。フロイトは、彼の患者たちが語る幼少期の性に関連する体験を事実として受け入れたが、まもなく女性たちの証言の多くは空想であるとして自身の論を変更した。ハーマンは、フロイトのこうした方向転換を、彼が父権制度に挑戦することを恐れた結果とみなし、自身の研究と患者が性的被害を公にすることを、女性解放運動のひとつとして宣言する³¹。

ハーマンは、性的被害者は喪失した記憶を回復できると主張したが、それに対し、人に誤った記憶を植えつけることは可能であるという見解が専門家より出されている³²。過誤記憶をめぐる対立する論の是非を検証することは本論の目的ではないが、ハーマンやバス & デイビスが、「真実(と想うこと)を語れ」というメッセージを自らの患者や読者に強く訴えたことは注目に値する。精神医療の専門家ではないエレン・バスが性的被害者を支援する活動に乗り出したのは、彼女の文章創作ワークショップに参加した女性が、自身の近親相姦の経験を記した手記をグループ内で発表したことに始まるという。

バス&デイビス、そしてハーマンは、同種の体験をしたもの同士が集まり、グループ内で構築される相互関係によって傷を癒す療法を特別視する。だが、なぜグループ療法が特に有効だとされるのか。ニコラス・ローズによれば、20世紀に急速に数を伸ばした、心理学者、精神科医、心理療法士、ソーシャルワーカーといった精神の専門家の特徴は「寛容さ」にあり、専門家の言葉遣い、振る舞いの文法、判断の様式を他にも喜んで分け与え

るといふ。ローズは、フーコーのいう司牧的権力を一歩すすめて、専門の「羊飼いの」指導のもとではなく、「羊たち」自身が互いの心をケアするために集まることを「司牧主義の民主化」と表現する³³。

ここで『17歳のカルテ』のある場面を思い起こしたい。専門の資格を持たないバスが主催するアマチュア・セラピーが成立するように、病む少女たちが、カルテに記載された自分や仲間の診断名や内容にコメントできるのは、患者が医学的リテラシーをメディアによって得られる社会背景を反映したものであろう。

アンナ・フロイトは、心の成長において特に「自我」を重視したが、1940年代から70年代の米国精神医療でもっとも影響力を誇ったのは、ハインツ・ハルトマンを代表する「自我心理学」であった。ケイセンは精神分析を受けるに際し、仲間の中で彼女だけが分析を受けるに足る「統一された人格」(integrated personality)、いわば自己をまとめうる「強い自我」を持つという説明をうけて気をよくする(118)。さらに彼女は、医師を相手にフロイトの用語を使って分析をしてみせる。

個人の内面で自己の倫理化がすすめられたのは、ヴィクトリア朝時代であったが、20世紀末には、一般人が性生活を含む多岐にわたる項目で専門家に相談する告白が各種メディアでばらまかれた。ローズは、虐待を受けた者が償いを求めて目にはみえない傷を証言することでアイデンティティを獲得する傾向に、治療が自己実現の技術であること、しかもその痛みや自己実現が個人的にみえながら集団的なものであることを読みとる³⁴。バスとデイビスは先にあげた指南書で、性的被害者が裁判に訴えても多くの場合、望むような結果は得られない現実を示しながらも、公の場で発言することで「自分の力」を実感することができると読者を鼓舞する³⁵。つまり、バスやハーマンが唱えるのは、一言でいえば「自己実現」であるといえよう。性的虐待者が記憶を取り戻すとき、本当の自分が理解できるという信仰が世に流行した背景には、公民権運動の結果、女性の権利が向上したという説明ができるだろうが、あわせて指摘したいのは、「現実」に客観

性が求められない風潮である。

カート・アンダーセンは、1980 から 90 年代にアメリカが静かに「ファンタジーランド化」したと主張する。現実と幻想の境界線を揺るがす幻想産業は、B. T. バーナムのショービジネスに代表されるように 19 世紀のうちに根つきはじめたが、60・70 年代の対抗文化において、ジャン = ボードリヤールのハイパー・リアリティ概念等、現代思想がアメリカで流行した結果、20 世紀末には疑似科学や超常現象も信じるリアルなものとなった³⁶。こうした風潮を反映するセラピーでは、虐待の事実の真偽よりも、顧客が虐待をリアルだと感じることのほうが重要となる³⁷。

5. メディアと病のイメージ

40 代になったケイセンは、かつて自らに下された病名「境界性人格障害」を DSM と呼ばれる『精神障害の分類と診断の手引き』第 3 版に参照し、「この障害は女性に多い」ではなく、「この障害の診断が下されるのは一般に女性の方が多い。」(下線部筆者、157) という記述に敏感に反応する。また、自己像や対人関係の不安定が特徴であるという概要もまた、広く「若者の特性」(219) として認知されているのではないかと問う。

2013 年に改定された最新の DSM 第 5 版では、パーソナリティ症候群の診断基準から、患者のジェンダーに関する記載が削除されているが、「その人の属する文化から期待されるものより著しく偏った、内的体験および行動の様式」³⁸ が認知や感情の領域に現れるという記載があるように、心因性疾患は客観的な形態を持つわけではない。あるひとつの心因性疾患が成立するには、患者と医師の同調がメディアを通して社会全般で共有され定着していく過程がみられる。

フロイトの師シャルコーは、医師集団やより広い社会にヒステリーを可視化して示すため、パリのサルペトリエール病院での公開講座で、患者の劇的な症状を催眠術により出現させた。G・ディディ = ユベルマンは、サルペトリエールの女性患者たちが男性医師相手に繰り返し広げた「肉体的誘惑」

を、「契約」、あるいは「共謀」と呼ぶ³⁹。ヒステリー患者は、不治の精神病の烙印をおされなため、医師の持つヒステリー概念を強固にし、保証する必要があったというのだ。シャルコーは、ヒステリーの概念を医師の理想通りに体现するレニヤール・オーギュステーンをはじめとした患者の撮影を行う写真部門を病院内に設置した。

男性医師と女性患者の連繋と病のイメージの伝播は、イギリスにも見出すことができる。医師ヒュー・ウェルチ・ダイヤモンド (Hugh Welch Diamond, 1809-1886) は、保護院で何人もの女性患者を撮影した。ダイヤモンドは、自らをヴィクトリア女王やオフィーリアであると妄想する女性患者たちに驚きつつ、彼もまた、患者の頭上にオフィーリアを想起させる草花の冠を乗せた写真を撮影した。ヒステリーに罹患した女性の視覚イメージが社会に定着する背景には、当時新しいメディアとして登場した写真技術と共に、シェイクスピアという、当時の医師や芸術家、そして患者にも好まれた共有文化が利用されている⁴⁰。

ダイヤモンドの親友で同じく写真術に没頭したルイス・キャロルが生み出した少女アリスは、アイデンティティの自認を絶えず問われるゆえに、今なお「狂気」のイメージと結びつけて翻案作品が生み出されることも多い。ケイセンもまた、少女が精神を病むイメージをアリスに重ねる。ケイセンが「不思議のほら穴に落ちていく」(41)と表現するとき、「アリス」という言葉はどこにもないが、読者はすぐに『不思議の国のアリス』を想起するだろう。

ケイセンは、メディアが病院に隔離された少女たちの生活に入り込む様子、例えばテレビを軽蔑していたリサが徐々にテレビ室になじみ、少女たちが、スクリーンに映し出された、公民権運動に身を投じる群衆に自らを重ねる様子を回顧する。映画もまた、少女たちの生活に浸透していた60年代のメディアを別の形で表現する。スザンナは、テレビを通して恋人の誕生日がくじにあたり、彼がヴェトナム戦争に徴兵されたことを知る。スザンナのルームメイト、ジョージナは、『オズの魔法使い』を熱心に読み、テ

レビ室ではドロシー役のジュディー・ガーランドを食い入るように見つめる。ジョージナの診断名「精神分裂病」は、映画では、誰もが知る米国初のファンタジー小説と映画への耽溺に翻案されている。

アメリカで認識された精神疾患、PTSD やうつ病などが世界中に輸出される現状に着目するイーサン・ウォッターズは、あるひとつの疾患は、メディアの仲介のもと文化的に認知されることで、苦しみを表現する型として普及していくと主張する⁴¹。ケイセンもまた、「ソシオパス」という自分の病名に誇りを持つリサは、後から入院した少女にも同じ病名が与えられると、張りあうように2人の問題行動が多くなったと証言する(59)。病名は、患者にそれらしい振るまいを許すとも考えられる。

おわりに：〈わたし〉の病は〈わたし〉の「物語」

『17歳のカルテ』が公開された1999年、18歳の少女サラ・シャンドラーが少女たちの手記を集め編纂した『オフィーリアは語る』を出版した。少女の自我探求をテーマとする本を出す企画は、サラが心理学者メアリー・パイファーによる『蘇るオフィーリア』(1994)を読んだことに始まる。パイファーは、1980年代・90年代にセラピストとして接してきた思春期の少女たちの問題を、父親やハムレットの承認を得る以外に自己を保つことのできないオフィーリアのイメージに重ねる。パイファーは、読者の不幸の要因は家族にあると主張する多くのセラピー本とは異なり、問題の原因を家族だけに求めることはない。ただし、書くことで「本当の自我」⁴²を探そう少女たちに推奨するのは、同時代の心理療法と同じ系統であると言えよう。

ケイセンは、脳神経学の発達後、投薬治療が一部の疾患に力を持ち始めたことを踏まえ、それでもなお「こころ」の存在する余地は大きいという。「セロトニンが足りないと言うのと、世界は不毛だと思い、そうした思考に駆りたてられる人間について芝居を書くのとは、大きな隔りがある」(137)と記すように、患者は、苦しみを〈わたし〉だけの「物語」として表

現したいのではないか。

フロイトが世に出た『ヒステリー研究』は、患者の現実が医師の側の主観により再構築され、「小説」のように構成されているという見解がある⁴³。この医師と患者のドラマは、はじめ患者だけで演じられた。アンナ・Oは、自身の空想の場「私的劇場」において、その片隅に冷静に分析できる自分もいることを知っていたとプロイアーは記している⁴⁴。10代のケイセンは、医師の所有車3台に「自我、超自我、エス」をあてはめ、精神分析の理論を使いこなしたが、『17歳のカルテ』の「語る」少女像は、精神医療の民主化を反映しているように思われる⁴⁵。しかしながら、個人の病を武器にした少女の自己表現は、あくまで思春期という文化制度の承認のもとに認知されるのだ。

註

1 映画の制作総指揮と主演を兼ねたライダーは、20代の時にうつ症状で入院した経験があり、スザンナ役を演じた2年後には窃盗の罪で起訴された。ライダーは実刑を免れ、貧しい窃盗犯よりも軽い処分を下された。クレプトマニア（窃盗症）は、20世紀初頭、フロイトの弟子たちによって女性の性欲が原因とされるなど、女性に結びつけられる傾向があったが、レイチェル・シュタイアは、18世紀以降、様々な解釈が与えられてきた万引き行為を、集団的アイデンティティを示す文化的な事象と捉える。Rachel Shteir, *The Steal: A Cultural History of Shoplifting* (New York: Penguin, 2011), 35–45, 142–154.

2 ケイセンが病院から取り寄せ、原作で公開している自身の入院記録には「18歳」と記載されている。「17歳」という邦題には、思春期の範囲に対する文化的なイメージが反映されているようだ。

3 映画では、父と性的関係にあるデイジーが被害を訴えるわけではないが、病む少女の力の表出は、デイジーの病の核心を声にするリサ役を演じたアンジェリーナ・ジョリーの怪演によるところが大きい。ジョリーは、この役でアカデミー助演女優賞を受賞した。

4 池上英洋・荒井咲紀『美少女文化史：人々を惑わせる究極の美』（ちくま学芸文庫, 2017年）, 178.

5 Philippe Ariès, *Centuries of Childhood: A Social History of Family Life*, trans. Robert Baldick (Vintage Books, 1962), 359.

6 Susanna Kaysen, *Girl, Interrupted* (London: Virago, 1993), 166. 以下、原典からの引用は、本文中の括弧内に頁数を記す。

7 Yannick Ripa, *Women and Madness: The Incarceration of Women in Nineteenth-Century France*, trans. Catherine du Peloux Menagé (Minnesota: U of Minnesota P, 1990), 132.

8 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*, 3rd-revised (American Psychiatric Association, 1987), 347.

9 T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880–1920* (Chicago: U of Chicago P, 1981), 13.

10 *Ibid.*, 220.

11 Joseph F. Kett, *Rites of Passage: Adolescence in America 1790 to the Present* (New York: Basic Books, 1977), 152.

12 Barbara A. White, *Growing up Female Adolescent Childhood in American Fiction* (Westport: Greenwood Press, 1985), 16.

13 Susan Cheever, “A Designated Crazy,” *The New York Times*, June 20, 1993.

14 Charlotte Perkins Gilman, “Why I Wrote ‘The Yellow Wallpaper,’” *Forerunner* 4, 1913, 271.

15 Élisabeth Roudinesco, *Freud: In His Time and Ours*, trans. Catherine Porter (Cambridge: Harvard UP, 2016), 68.

16 Sander L. Gilman, *The Jew's Body* (New York: Routledge, 1991), 61–64.

17 サンダー・ギルマンは、フロイトの「症例ドーラ」同様、プロイアーもまた、アンナ・O がユダヤ人であることを症例から意図的に脱落させていると指摘している。*Ibid.*, 81. フロイトのユダヤ人としての劣等感が女性に転移されたことについては、以下を参照されたい。Gilman, *Freud, Race, and Gender* (Princeton: Princeton UP, 1993), 23.

18 Ernest Jones, *The Life and Work of Sigmund Freud* (New York: Basic Books, 1961), 158.

19 たとえば、米国の医者エドワード・クラークや英国のヘンリー・モズリーは、女性が月経に必要なエネルギーを勉学に消費すれば、健康を害すると考えた。Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness and English Culture, 1830–1980* (London: Virago, 1987), 124.

20 *Ibid.*, 137.

21 *Ibid.*, 139.

22 Ripa, 135.

23 プロイアー / フロイト 『ヒステリー研究』金関猛訳 (中央公論新社、2013)、445–6.

24 ミシェル・フーコー 『精神医学の権力: コレージュ・ド・フランス講義 1973–1974 年度』慎改康之訳 (筑摩書房、2006 年)、98.

25 Nikolas Rose, *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self* (London: Free Association Books, 1989), 132.

26 *Ibid.*, 171.

- 27 Hannah Green, *I Never Promised You a Rose Garden* (New York: Holt, 1964), 42.
- 28 Jonathan Bor, “One Family’s Tragedy Spawns National Group,” *The Baltimore Sun*, December 9, 1994.
- 29 Ellen Bass, and Laura Davis, *The Courage to Heal: A Guide for Women Survivors of Child Sexual Abuse*, 3rd (New York: Harper Perennial, 1994) FMS 財団を非難した第6章は、第4版(2008年)では削除された。
- 30 Judith Lewis Herman, *Father-Daughter Incest* (Cambridge: Harvard UP, 1981), vii.
- 31 Judith Lewis Herman, *Trauma and Recovery: From Domestic Abuse to Political Terror* (London: Pandora, 1992), 4.
- 32 FMS 基金顧問団のひとりでワシントン大学心理学教授のエリザベス・ロフタスは、人に誤った記憶を植えつけることができるという見解を示した。Bass and Davis, 511.
- 33 Rose, 264–65.
- 34 Ibid., 269.
- 35 Bass and Davis, 319.
- 36 Kurt Andersen, *Fantasy Land: How America Went Haywire a 500-Year History* (London: Ebury Press, 2017), 237–8.
- 37 Ibid., 328.
- 38 『DSM-5: 精神疾患の分類と診断の手引き』高橋三郎・大野裕監訳(医学学院、2014)、301。下線は筆者。
- 39 ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『ヒステリーの発明〈上〉: シャルコーとサルベトリエール写真図像集』谷川多佳子・和田ゆりえ訳(みすず書房、2014年)、257–58.
- 40 Showalter, 87–90.
- 41 Ethan Watters, *Crazy like Us: The Globalization of the American Psyche* (New York: Free Press, 2010), 33. 「苦しみの型の普及」という観点から、エドワード・ショーターもまた、「ヒステリー」と「神経衰弱」の診断基準の差別化が明確ではなく、ヒステリーは女性、神経衰弱は男性に多く下される病名であったと指摘する。Edward Shorter, *From Paralysis to Fatigue: A History of Psychosomatic Illness in the Modern Era* (New York: The Free Press, 1992), 223–24.
- 42 Mary Pipher, *Reviving Ophelia: Saving the Selves of Adolescent Girls* (New York: Riverhead Books, 1994), 255.
- 43 Roudinesco, 68.
- 44 フロイト / プロイアー、26.
- 45 90年代の思春期文学においても、性虐待を受けた登場人物が「語る」ことで自分の力を実感し、読者にもセラピー効果を与える例があることが指摘されている。以下参照されたい。Roberta S. Trites, *Disturbing the Universe: Power and Repression in Adolescent Literature* (Iowa: University of Iowa Press, 2000), 96.